

1.超満員のホールで圧巻のステージ!最高の時間でした! 2.写真中央は息子のイサさん「まいど屋アフロ珈琲」の焙煎士をされています 3.豆は2種類。タンザニアをベースにし飲みやすく冷めても落ちない旨味が自慢のマイルドブレンドと、ガテマラをベースにしコクのある少し懐かしい味のするカントリーブレンドです 4.神奈川県相模原市の山と湖に囲まれ水と空気の美しい自然豊かな場所で、その日の天候による湿度などを考慮し心を込めて焙煎しています 5.驚いたのが焙煎の機械の美しさ。豆を挽いたあと毎回丁寧に掃除をされるのでしょうか、何年も使っているとは思えないほどピカピカで機械への愛情が伝わってきます



ね。母もよく理解してくれて、今日はどっちや、万博か?学校か?と訊かれたりして。笑いますよね」

「万博の後、大阪にはピアノを置いたレストランとかが増えました。阿倍野にあった『モーツァルト』というレストラン。そこには外国の方も働いていました。そこで、中学一年生の私がピアノ弾くと「うまいやん」と言われて。「明日もおいでよ」と店主に言われ、お小遣いなんかもらったりすると、なんせ子供ですからね、メッチャ嬉しかったのを覚えてます」

とにかく生きて帰ってきなさい

綾戸さんのルーツを聞かされたような感じで、「そうだったのか!」と驚き圧倒されました。1975年、17歳の時に二人で渡米。行き先はハリウッド。たった二人で行く決心はなぜ出来たのでしょうか?

「決心?そんなもんなかったよ。ただ行きたかっただけ。大好きなフランクシナトラがどんなところで育ったのを見てみたくて。高校3年のころにはもう気持ちがおさえきれなくなつて、色々下調べしたんですよ」

「母に相談したら「ここまで準備してたら今日止めたつて、明日にはまた行きたいつて言うんやろ。それやったら早いほうがいい。早めに失敗したほうがなんぼでもやり直さきくから行つて!でもこれだけは言うとか。絶対に死んだらあかん。死ぬと思ったら帰ってきなさい。死んでもやるつて耐えたらあかん。そんなもん美学でもなんでもない。生きとつたら何回でもいけるんだから、とにかく生きて帰ってきなさい」と送り出してくれました。

夏休みの間に行つただけど案の定、帰国は9月中頃にまで遅れて。三学期は必死に学校行つて何とかギリギリ卒業できました」

「生まれて初めてのアメリカで17歳が3ヶ月間も一人で、モーターホテルを探したり、出会った人に泊めて欲しいとか、ましてや公園でたむろしている人にジャパニーズ・マッサージとか言つて指圧でアルバイトしたり。フリーのジャズコンサートや、古着市に行つたりとても楽しかったです」

いや思わず「凄いな」と口から出ました。帰国してからは、色々なアルバイトをして渡航費用を貯めて3回ほどただただ渡米を繰り返したそうです。そんな綾戸さんにお母さんが「理由もなく頑張るのも良いけど、次は少し目標をたてても良いのでは」と言われ、ニューヨークに行かれたそうです。

「そうなんですよ。母のあの言葉は私を押し付けてくれたね。ハリウッドでは音楽学校に行つたこともあつたんですが、何かポイントが定まらなかつた。そして次はニューヨークに行きました。レコード屋さんでゴスペルのレコードを探していると、店員さんに「ゴスペル好きなの?」と訊かれ「明日ぼくの行つてるチャーチ(教会)に行かないか?」と誘われハレムタベナクルというチャーチに行きました。そうしたら!まるであの「ブルースブラザーズ」の中のワンシーン。コメディーなのであんな風に映像に乗せたのかとも思っていたんですが、ほんまにあの感じでもう車椅子の人が、杖の人が、踊り出したりオデコに手をあてられて「Born, Born, Again」とゴスペルを歌い出したり。「天使にラブソングを」とは比べ物にならない迫力。私はそういう場所で引いてしまうタイプではないので、いつのまにか解け込んでいたの

を思い出します。でも音楽つてこんなに力があるんだと思いました。その世界の中で結婚もしたり、まあその離婚もしたり。そして長男を連れて、帰国しました。34歳だったかな」

お母さんであることを止めたならそれはあかん

そして綾戸さんは帰国後いろんな仕事をしている中、ジャズの世界に入つて行くわけですが、お訊きすると意外なこともありました。「私は気にCDを出すところまで行きませんでした。実はこのデビューは私にとつても意外なことで、別に準備はしていなかつたし、頭に描いていたことでは無いんです。帰国してからはとにかく息子を成長させることが一番で、ありつたけ仕事をしましたよ。N.Y.にいた頃の友人は、大概が日本ではミュージシャンなので、その人たちに呼ばれてボーカルとしてとかピアノとしてとかの仕事もしてはいましたが、私はやはり得意の料理とか、ピアノの先生をしていて、関西のジャズスクールなんかでも講師をしてました」

「そんなときピアノの南博君に長野のジャズフェスにボーカルとして呼ばれ、出演しました。ステージの後、フェスの関係者に「レコード出してみない?」と言われ、なんかヤバイ人と勘違いして名刺だけもらつて、それを南君にみせたらなんか凄い人だったらしくて。でも私には分からない事だし、売れるとも限らないことができる立場でもなかつたので。何しろ家族を食わせることしか頭になかつたから。なので連絡するのを忘れて過ごしていました。すると向こうから電話が入つて。「イーストワークス」という聞いたこともない会社(後のレコード会社兼所属事務所)からの連絡

